

学生への貸出を伸ばすために

—利用規則からの一考察—

川島 千賀子

1 はじめに

「活字離れ」という言葉が登場して久しい。また「大学生像の多様化」とも言われるように大学生像・学生生活そのものが変わって来ている。このことは「図書館に行く必要性を感じない」という図書館離れ現象の大きな原因になっているのではないだろうか。

「利用を伸ばすにはどうしたら良いのか」、これは館種を問わず図書館の持つ永遠の課題とも言えよう。「何が利用を妨げているのか」の観点に立って考えてみた。まず本学図書館と東京経済大学図書館が行なった、学生アンケート調査のうち「図書館を利用しない理由」をそれぞれ3位まで挙げてみた。

1. 中京大学図書館学紀要第2号 「学生の図書館利用に関する調査から」(→①)

- (1) なんとなく
- (2) 手続きがめんどろ
- (3) 必要な本は買う

2. 東京経済大学図書館利用者実態調査報告 (→②)

- (1) 利用しなくてもさしつかえない
- (2) 行く時間がない
- (3) 手続きがめんどろ

共通して挙がっている「手続きがめんどろ」なことは一度図書館を訪れた学生がその後、利用者として定着しない原因になっているとも考えられ

る。

手続きを始めとする利用規則、これは利用者のための規則でなく、図書館が物品や資料の管理を主として考え、できあがった管理規則になり過ぎているような気がする。もちろん資料を管理していくことは重要なことであるが、それが利用を妨げているとすれば考え直す必要があるのではないだろうか。

2 利用を阻む要因

本学図書館の利用規則を再確認するために次の2冊の資料を参考に自己診断してみた。

(→③)

1. 「大学生と図書館」より「良い図書館」かどうか分かる9項目を館員6人が診断したものが表1である。

○合格、×不合格、△どちらともいえない

- (1) 開架式の本はたくさんあるか？

5万冊以上が合格

- (2) 館外貸出の手続は簡単か？

4冊2週間が標準

- (3) 新刊書はたくさんあるか？

- (4) 基本的文献はそろっているか？

- (5) 窓口に専門職員はいるか？

- (6) 資料を探す手段はそろっているか？

- (7) 図書館のPRは熱心か？

- (8) 開館時間は長いのか？

- (9) 施設は整っているか？

全員が×にしたのは(1)、(7)、(8)、(9)である。

(3)、(4)、(6)も合格とは言えない。総合的には

「良い図書館」でないことは明らかである。

因みに9項目のうち6～7項目○があれ

表 1

	A	B	C	D	E	F
(1)	×	×	×	×	×	×
(2)	○	○	△	△	○	○
(3)	×	△	×	×	×	△
(4)	×	×	×	×	△	×
(5)	○	○	○	○	○	○
(6)	×	×	×	×	×	△
(7)	×	×	×	×	×	×
(8)	×	×	×	×	×	×
(9)	×	×	×	×	×	×

ば合格である。

2. 「学生への貸出を伸ばすために」(→④)から貸出を伸ばすための7つの

要因を挙げてみた。◎大要因 ○要因 △間接的要因

- | | | | |
|--------------|---|----------|---|
| (1) 館の立地条件 | ○ | (5) 貸出方式 | ◎ |
| (2) 開館日数 | △ | (6) 貸出条件 | ◎ |
| (3) 開館時間 | △ | (7) 閲覧条件 | ◎ |
| (4) 登録制と非登録制 | ◎ | | |

同書は京阪神地区で実際に貸出の多い大学での実態調査をもとに、貸出を伸ばすため多方面からのアプローチを試みている。その結果、貸出を伸ばすための7つの要因を挙げ、大要因、要因、間接的要因とそれぞれ評価を与えている。本学図書館では7要因のうち大要因の(4)～(7)がすべて不合格、加えて館の立地条件も良いとは言えない。すでに身近な存在ではなくなっている図書館が、このままではますます遠去かってしまうのではないだろうか。また本学に限らず、素晴しく内容の充実した資料を蔵していても、最新設備を備えていても利用のための手続きが複雑であれば、利用は伸びない。

改善すべき点がだいたい挙がったので、具体的にどうすれば良いのか考えてみたい。東海地区の私立大学を中心に無作為に図書館利用案内を集め、主な規則について表にしたのが表2である。表の作成については1976年東海地区大学図書館相互利用ハンドブック(→⑤)を参考にした。

3 貸出業務における改善点と開館時間

3—1 登録制と非登録制

図書館を利用すること、資料の提供を受けることは学生にとっては当然の権利であり、登録しなければ利用できない、という特殊な権利ではないはずである。登録制については学生にとっても、図書館にとっても二重手間ではないか、という意見が多い。

本学図書館では、資料の館外帯出希望者に対し、1年間有効の図書帯出

表 2—1

	開館時間		閉館時間		登録制		館内閲覧		貸出回数		参考図書		製本出雑誌数	
	1976	現在	1976	現在	1976	現在	1976	現在	1976	現在	1976	現在	1976	現在
愛知大	9:00	9:00	21:30(水・金) 20:30(火・木・土)	21:30	×	×	制限なし	制限なし	15	15			15	15
愛知学院大	9:00	9:00	16:30 (12:30)	16:30 (12:30)	○	○	3	3	14	14			14	7
中部工大	9:00	9:00	20:00 (17:00)	16:50 (12:00)	○	○	2	2	7	5(開) 14(書)				
金城学院大	9:00	9:00	16:30	17:00	×	×	制限なし	制限なし	14	14				
名城大	9:15	9:15	20:45	20:45	×	○	3	3	7	7				
名古屋学院大	9:30	9:00	17:00 (12:00)	17:00 (13:00)	×	×	制限なし	5	14	14				
名古屋芸術大	9:00	9:00	16:30 (14:00)	16:30 (14:00)	○	○	〃	制限なし	7	7			7	
名古屋女子大	9:00	9:00	17:30	17:30	×	×	3	〃	7	7			一夜	
名古屋商科大	9:30	9:00	16:30 (12:00)	16:30 (12:00)	○	×	2	2	7	14			7	
南山大	9:00	9:00	18:30(水) 17:30(火・木・金) 16:30(土)	18:30 (15:30)	×	×	制限なし	制限なし	14	14				
日本福祉大	9:00	9:20	21:00	21:20	×	×	3	〃	7 14	14			7 14	
名古屋市立大		9:00		17:00 (12:00)		×		〃		7				
名古屋大		9:00		20:00 (17:00)		×		〃		14				4
東京水産大		9:00		18:00 (14:00)		○		〃		14				7
京都大		9:00		21:00 (17:00)		○	3~5			14				14
大阪大		9:00		18:00 (14:00)		○	8							7
島根大		9:00		20:00 (16:30)		○	5			14				
徳島大		9:00		20:00 (16:30)		○	5			7				
本学	9:00	9:00		17:30 (12:30)	○	○	4	4	7	7				

※ 国公立大の1976年の利用規則については資料なし
 ※ 登録制については学生の意志によって登録を行なう図書館が○、それ以外は×とした。

表 2-2

	製本雑誌		未製本雑誌	貸出期間の更新		予約制度	督促方法	罰則		購入希望図書制度
	貸出1976	冊数現在	貸出1976	冊数現在	1976現在	1976現在	1976現在	1976現在	現在	現在
愛知大	5	5	15		○	○	ハガキ	貸出停止	〃	○
愛知学院大	2	3	15		○	×	〃	〃	〃	○
中部工大					○(文学書のみ)	×	掲示	〃	〃	○
金城学院大					○	○	ハガキ	〃	〃	○
名城大					○	○	〃	〃	〃	○
					○	○	〃	延滞料	延滞料	○
名古屋芸術大	2				○	×	〃	貸出停止	貸出停止	○
名古屋女子大					○(1週間)	○	掲示	〃	〃	○
名古屋商科大	2				○(2回)	○	ハガキ	なし	〃	○
南山大					○(4週間まで)	○	〃	延滞料	延滞料	○
日本福祉大		1			○(1回)	○	〃	貸出停止	貸出停止	○
名古屋市立大					○	○	掲示	〃	〃	○
名古屋大		5		9:00~12:00	○(1回)	○	〃	〃	〃	○
東京水産大		3			○(1回)	○	〃	〃	〃	○
京都大		5			○(1回)	○	ハガキ	〃	〃	○
大阪大		4(8)			○(1回)	○	〃	〃	〃	○
島根大					○(2回)	○	掲示	〃	〃	○
徳島大					○(1回)	○	〃	〃	〃	○
本学					○	○	ハガキ	なし	〃	○

※ 貸出期間の更新と購入希望図書の1976年の資料は全大学なし

※ 貸出期間の更新については具体的に条件を設けている大学は () 内に示した。

証を発行している。多少のやり方は違っても本学と同じ学生の意志による登録制の大学は多い。表2を見る限り、そうとも言えないが、全国的に見ると、登録制がまだまだ多い。これに対して非登録制の大学の中には、登録を必要とせず学生証だけで貸出のできる大学もあるが、蔵書数、学生数から考えても中規模校には不向きである。そうすると登録制か貸出券全員配布制かになろう。もちろん全員に配布するのが理想的であるが、ムダになる貸出券が出て来るのではないだろうか。そこで本学の昨年度の登録率を各学部毎に表わしたのが次の表3である。

表 3

	文学部	法学部	商学部	体育学部	大学院	計
発行枚数 (枚)	864	462	676	328	43	2,389
登 録 率 (%)	53	24	21	13	71	26

単純に考えても全学生の4分の3は昨年1年間、図書館の資料を1冊も借りなかった、ということになる。これでは全員に貸出券を配布しても、その大半は使われないまま捨てられる可能性は大きい。

逆に、貸出券を全員が持つことによって図書館のPRになる、という意見もある。即、利用につながるかどうかは疑問であるが、学生証と同じように常時携帯すべきもの、また図書館利用を始めとしすべての在学証明になるようなものにすれば効果は充分期待できよう。電算化に伴ない、IDカードを全員に交付した名古屋大学では、新図書館になり、大学の中心に位置し、図書館の雰囲気も変わったなど他の要因もあるが、入館者数が一挙に7倍増、貸出者数も約6倍に急増している。(→⑥)

3—2 貸出方式

貸出を伸ばすのに直接影響すると思われるのが、先述の登録制かどうか、というのと、この貸出方式である。貸出方式は図書館用語辞典によると6種類。もともと公共図書館用に考案されたものを、様々に応用し取り入れられている。どこの大学図書館の利用案内を見ても、カードの記入例まで

載せて説明しているにもかかわらず、読んだだけでは理解できないものが多い。

貸出業務においては、最低 3 つの記録（書名、貸出者氏名、日限）を残し、さらに利用者名が記録に残らない、利用者の読書・思想の自由を守るという条件を満たし、最も簡便な方法を採用することが良い。

各館の状況を見てみると利用者又は図書館側が何らかを記入する方式か、記入なしで手をわずらわせないコンピュータ式かになる。後者の方は、コンピュータ導入の前に、図書、IDカードが整備されなければならず、現在準備段階にある大学が多い。すべてコンピュータでOK というところは現在のところ東海地区では 1 校のみ。しかし社会そのものがコンピュータ社会と呼ばれる時代であり、図書館もそういう時代への過渡期にある。近い将来、すべての図書館で貸出業務に電算機を取り入れる可能性はかなり大きい。

本学におけるアンケート調査の結果を見ても、貸出について改善すべきという回答が約半数あり、その改善点としては「手続きを簡便にする」が第 1 位に挙がっている。

登録制、貸出方式について言えば、やはり電算化が一番妥当であると言える。

3—3 貸出条件

先述の「大学生と図書館」では、なるべく簡単な手続きでたくさん本を貸してくれる図書館が合格となっていた。19校を見ても貸出冊数は10校が4冊以上、貸出日数は12校が2週間となっており、4冊2週間が標準である。本学では3冊1週間であるが、カウンターでは「試験期間中でも3冊ですか?」とか「1週間しかダメなんですか」という声をよく耳にする。アンケート調査では日数を多くして欲しい、という学生が34%、冊数をふやして欲しいという学生は22%。他大学図書館の日数冊数を見ても本学は少な過ぎるのであるし、これらの数字は無視できないと思う。因みに表 1

で現行の規則と1976年の規則とを比べた場合、実に5校が冊数日数について改善を行なっている。最近では大学図書館でも貸出冊数を制限しないところがある。貸出の期限さえ決めておけばその間に読める本の冊数は個人のペースで決まって来る。貸出が集中するため、日数冊数共、現状を余儀なくされているのならば、それなりの対策を考えれば良いのではないだろうか。現に長期の休暇に入って貸出日数は1ヶ月程なのに、冊数が3冊ではおかしいような気がする。また貸出の集中する図書については、各学部、学年毎に分析し、揃えられるものは複本で揃え、利用者の不満を解消するよう対処すべきではないだろうか。

3—4 閲覧方式

これは、開架率、開架冊数の問題である。②のアンケート調査によると図書館資料へのアプローチ、資料を探すときはどうするか、という質問に約半数の学生は直接、開架書架へ行くと答えている。19校中、開架率100%の大学は2校、50%以上は3校となっている。貸出が多いのと開架率が高いのとはあまり関係がなく、むしろ、1回に貸出せる冊数の多いことが関係するようである。しかし、開架図書が多いことは利用者にとって望ましいことであり「良い図書館」であるための必須条件であると言えよう。新刊、話題本やベストセラー、学生希望図書、選書者の主観が入るかも知れないが、利用者の興味をひくような図書を開架に置くとか、また新版や改訂版などは古い図書と入れ換えるなど、細かい心配りを大切にしたい。

3—5 開館時間

本学図書館の利用時間は午前9時から午後4時30分迄という規則であるが、実際には6時迄開館しており、授業終了後1時半の時間外開館を実施している。調査対象校のうち、2部を併設していない私立大学で時間外開館（便宜的に午後5時以降の開館とする）を実施しているのは本学と南山大学の2校。2部を併設している大学では午後9時前後まで開館している。

「授業終了後、最低 3 時間は開館しているべき」という意見があり、午後 8 時位迄開館しているべきであろう。

昨年 1 年間の時間外入館者数の月別 1 日平均を表にしたのが次の表 4 である。

表 4

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	平均
入館者数(人)	15.1	21.2	27	34.2	/	33	18.6	25.8	32	46.5	33.5	/	28

時間外入館者数は 1 日の入館者数の約 9 % (平均) である。しかし大部分の学生は午後 4 時 30 分迄に入館して閉館間際に帰るのであるから時間外入館者数で図書館の時間外の利用は推測できない。1 日の入館者状況を見ても講義の合間や終了後図書館を利用する学生が多いこと、アンケート調査の結果より本を利用するより勉強室として利用する学生が多いことなどを考えると、やはり 1 時半の時間外開館は短かいと思う。土曜日の時間外開館実施校は、3 校であるが、試験期間中の土曜日は午後も開館した方が良いのではないだろうか。

また本学の場合、豊田分館は午後 4 時 50 分閉館で、これはスクールバスの時間帯に合わせて決められたものである。

20 分間の時間外開館であるが、その間の入館者数は年間 50 人前後、ほとんど午後 4 時 30 分迄に入館した学生の利用である。学校と寮を往復する体育学部の学生であるので、図書館でゆとりの時間を過ごせるように、と検討中である。

また、豊田と名古屋の図書館間の相互貸借を行う場合、豊田と名古屋との連絡便が 1 日 1 便でたいへん不便であることもあげておきたい。

4 リクエストサービス、その他

学校の図書館には、読みたい本がない、これもよく耳にする声である。大学図書館は学術、研究のための情報センターであると同時に、総合的な教養を高めるための資料も用意されなければならない。特に後者の方は、

学生の自由な意志による読書であるから意義深いのである。

「市民から求められる資料は、草の根をわけても探し出し提供する。」は和泉市立図書館のスローガンであった。学生から要求される資料を図書館側ができる限り準備するというリクエストサービスは、情報過多時代の今日、特に注目されている問題である。

予約、購入、相互貸借からなるサービスのうち、相互貸借については直接の貸借はなく利用者に直接、所蔵館へ行ってもらうか、文献複写を依頼しており、実際は行なっていない。予約については、貸出希望図書が集中する時期に多い。期限を守らないため次の希望者が迷惑することもある。また予約希望者本人が予約しているのを忘れていたり、館員同志の連絡が不徹底で予約されている図書を他の学生に貸してしまうこともあるようだ。

購入希望図書制度については昨年度の購入希望図書受付冊数は 108冊。うち購入しなかったのは26冊（うち品切れ5、絶版2、刊行なし1）。すでに所蔵している本を希望して来たもの以外はほとんど購入している。卒論用の図書と話題本が大部分である。受入が終わったら最優先で整理し、貸出しできるようにしているが、希望者自身が忘れていたり、図書が入ったことが伝わらなかったり、ということが多い。これらは掲示板を大きくするか館員が伝えてやるとか図書館側の努力で解決できることである。利用が少ない理由のひとつに掲示板に名前が出るのがイヤ、と言う学生がいることも加えておきたい。

予約も購入希望もPR 不足のため、そういう制度があることを知っている学生にしか利用されない。また制度自身が確立していないから不手際も多い。まず、徹底的にPR してそういう制度のあることを利用者に浸透させ、さらに、その要求に応じられるよう努力していかなければならない。

最終的には選書にどの程度学生の意見や希望を反映させるかが問題である。名古屋市立大学医学部図書館では学生自治会の要望を選書に取り入れている。また館員で資料収集委員会をつくっている大学もあり、選書の面からも改善すべく検討していかなければならない。

アンケート調査より、規則、資料以外の点で改善すべきと答えているのは、利用指導、コピーサービス、施設、環境の美化など。具体的に対策を考えなければならないもの、館員の働きかけでかなり良くなるもの、いずれにしても、利用者を待っているだけの図書館であってはいけない。

5 お わ り に

利用規則という一つの側面から「どうしたら利用が伸ばせるのか」について考えてみた。利用を伸ばすための要因は複雑に絡みあって存在している。

言うまでもなく、利用規則は図書館資料と利用者とを直接結ぶものである。利用者の意見や希望を取り入れればそれなりの効果はあるだろう、と考えられる。しかし表 2 を見てみると、開館時間の延長 3 校、貸出日数、冊数をふやした大学が 5 校というように利用者の声へ歩み寄った例と開館時間の短縮が 2 校、雑誌の貸出を禁止した大学が 3 校と新たに制限が加えられた例との両方が見られる。思ったほど改善されていないのは、規則が変更されるには複雑な手続きが必要であることや他の規則などに影響が出る場合もあるため簡単に改められないのが原因であろう。逆に規則が厳しくなっている例は、期待するほど効果がなかったこと、改善に伴ない別の問題が出て来たことが原因ではないだろうか。今後も大学図書館の電算化に伴ない各大学の規則は当然変わって行くであろう。

しかし別の面、例えば貸出方式を変えたり、パンフレットを手帳にするなどで成果をあげている大学もある。いろいろな方面から努力をしている。

機械化の波はとどまるところを知らず、これからの図書館がどうなっていくのか想像もできないのが正直な感想である。カードレス時代、さらに進んで本のない図書館とか、従来の図書館のイメージ、即ち、本があって、利用者がいて、館員がいてという図書館はその姿を確実に変えようとしている。そこまで行かなくても閲覧業務に電算機が導入されるだけで貸出手続の簡素化など利用しやすくなれば、貸出の方もかなりふえる、と思われ

る。しかし、それだけで、すでに図書館、書物から遠去かっている学生の足を図書館へ向けさせることができるだろうか。

根本的には学生が何を求めているのか、そのために図書館がしてあげられることは何なのか、を常に考えること。定期的にアンケート調査を行なうとか投書箱を設けるなど図書館が積極的に利用者の要求を受け入れていこうとする体制をつくり、その要求に沿うよう努力することによって誠意を示すことが重要である。利用され、反響があつてこそ、改善への道が開け、方向が定まるのではないだろうか。柔軟な発想と即応できる行動力、そして利用者との対話の中から“魅力ある図書館づくり”への努力をして行きたい。

〔参考文献〕

1) 中京大学図書館学紀要 第2号

“中京大学における学生の図書館利用に関する調査から” 福井司郎

2) これからの図書館サービスを求めて

—東京経済大学図書館利用者実態調査報告— 東京経済大学図書館編

3) 大学生と図書館 日本図書館研究会編

4) 学生への貸出を伸ばすために 大学図書館問題研究会編著

5) 東海地区大学図書館相互利用ハンドブック 1976年

6) 名古屋大学附属図書館報 No71

7) 現代の図書館Vol.20 No 3, 4 リクエストサービス特集

“購入希望図書制度” 諸岡博美

8) 館灯 1981第21号

“利用者と資料” 小池勝子